

はじめに

J.S.ミルの経済学方法論に関しては、『論理学大系』で示された具体的演繹法の内実、およびその方法が『経済学原理』に首尾一貫して適用されたか否かといった問題を巡り様々な議論が集積されているが、ここでは、『論理学大系』の基底となっている帰納的方法と具体的演繹法の位置関係に焦点を当てつつ、ミルの方法論を帰納的方法の中に再定置する。そのため 1) 帰納的方法という言葉の 19 世紀前半から中葉における変遷、2) ミルに先んじて抽象的公理主義的方法論への批判を展開したマカロクの方法論との対比、3) ジェボンズや形式論理学との対比を通じて経済学の数学化の問題を取り扱う。1) は『論理学体系』でなぜ帰納法が再定義され提出されなくてはならなかったのかという問題である。2) はこれとはミル・マカロクの「演繹的」方法批判やそれぞれの方法論の強調点を比較することによって、具体的演繹法の特徴を明らかにすることをねらいとしている。3) は記号論理学や経済学の数学化という問題へのミルの反応を通じて、帰納・演繹の役割を明確化することをねらいとしている。なお、本報告が「J.S.ミルと統計学的方法」という表題を掲げたのは、ミルとマカロクの方法論上の対比が、統計を事実の記述として経験的にとらえるとして、そこからどのように推論を導き出すのかという点に関わるからであり、また、ミルとジェボンズとの対立点が人間の数値化をどのように考えるかという点に関わるからである。

#### 1) 素朴なベーコン主義批判：帰納法と仮説

18 世紀をベーコンおよびニュートンを科学的方法論の規範と仰ぐ帰納主義の絶頂期とするならば、19 世紀前半はベーコン像および「ベーコン的帰納主義」に対する疑問が提起された時代でもあった。その原因は多様であろうが、一つには科学における想像力および創造力の役割が認識されるようになったことがあげられる。その中で事実の単純な収集を帰納法として退け、人間の理性と調和し、経験的事実を下支えする必然的真理があると主張し、こうした諸点をベーコンもまた認めており、理性 (Idea) の適切な地位を認める方法こそ「適切なベーコン主義」と呼ばれるべきであったとしたのが、コールリッジやヒューエルなどドイツカント派の影響を強く受けた人々であった。そしてこの適切なベーコン主義に基づいた創造的人物としてのニュートンが、ベーコンに変わって科学における真の方法論を創始した人物とされたのである。さらに時代が下り 19 世紀後半になるとベーコンはもはや顧みられることなく、ニュートンのみが仮説的理論的近代科学の創設者として提示されるようになる。

以上のような全体状況の中、単なる事実の収集を帰納法と同一視しないという姿勢は、ヒューエルだけでなくハーシェルやミルにも共通する点であり、必ずしもカント的影響に還元されるわ

けではない。むしろ、単純な観察や事実の羅列・収集ではなく、何らかの予備的仮説に基づく観察や事実の収集が科学の基礎であり、観察に先立つ仮説の存在が科学の発展にとって重要であることは、その強調の度合いの違いはあれ、一定程度共有されていたといえよう。したがって、この段階において、帰納的科学方法論にとって仮説の存在は対立するものではなかった。その中で、ミルが「論理学体系」のなかで直面したのが、経験主義的な帰納法的科学方法論を打ち立てるとすれば、単純な帰納法ではない帰納法とはどのようなものか、それはどのように一般原理を導き出すことができるのかという問題であった。

『論理学体系』においては、帰納法の再定義に先立つ名辞論や分類論において、ミルは人間の思考方法の中に弱い意味での仮説の形成と適用および検証と言った科学的方法論の萌芽を置き、これを基礎としつつ、さらに洗練された形で論証されるべき一般法則や原理を発見する方法論として4つの帰納法をおく。その特色は、事実の羅列や収集ではなく仮説を伴う事実の再配置によって、一般原則を導き出す点にあり、さらに仮説的結果を経験的手法（観察・実験）によって検証する点にある。このように帰納法は認識論と密接な連携を持って再定義され、人間の認識一般の方法論として提示される。しかしよく知られているように、ミルはこうした帰納法をそのまま複雑な社会現象に適用することは、事例と状況の複雑さと多様性およびそれぞれの要因が混合して存在すること、実験の困難性から、不可能であるとして、帰納と演繹を混合した方法を、特に経済学に対してはその固有の方法論として具体的演繹法を提起する。

この方法論は仮説的演繹法ともいわれ、先に挙げた帰納法における予備的仮説に比べ、限定された条件や領域において妥当する人間性の一般法則から予測される仮説であるという点で、経験に先立つ演繹的色彩を持つものである。しかし経験から出発する帰納法においても、観察は限定された経験から導き出した予備的仮説を持って行われるのである。また人間性に限らず、すべての一般法則は（因果法則や斉一性の法則も含めて）個別命題の成立とともに個別に立証されていくものと考えられており、具体的演繹方法においても、通常の帰納法と同様、一般的法則は個別具体命題の立証とともに再検証される必要がある。さらに具体的演繹法と幾何学的方法との相違として、「経験に先立つ（アプリオリ）推論の正当性にその信頼性が存在するのではなく、推論の結果と経験に基づく（アポステリオリ）観察から得られた結果との一致にある」として、検証段階における経験・事実の役割を重んじている。そして唯一の演繹的論証方法である三段論法は、大前提という形式で一般命題をメモ書きし、新たな個別事例の検証を一定の形式や手順を定めてより確実に行うための手段として位置づけられている。

具体的演繹方法は幾何学的方法（ある一般原理のみを複雑な社会現象の分析や原因の指摘に適用する方法）に対する批判として提示されたことはよく知られたことであるが、マカロクもまたミルに先立つ形でこうした方法（マカロクは教条主義的方法と呼びその代表者をシーニアに指定する）への批判を展開しながら『経済学原理』を執筆していた。2) ではマカロクとミルの方法

論的異同を通じて、ミル具体的演繹法の位置づけを明確にしていきたい。

## 2) ミルとマカロク：経験による検証と経験による豊富化

マカロクは経済学方法論に関して単独の書物を残しているわけではないが、『経済学原理』の序文およびイントロダクションにおいてシーニアおよび教条主義的方法への批判を展開しつつ、自分の方法論を提示している。

マカロクはシーニア的な方法を一般原理や法則の無制限の適用として批判する一方、個別事例が一般原理や法則から逸脱していたとしても、それがそのまま一般原理の誤りを証明するものではないとする。マカロクは経済学を支える基底的な一般原理を、生存のために労働しなくてはならないという人間の条件と、世の中に出たい、よりよい生活をしたいという人間の欲求に求める。その上でこうした成長の原動力を効率的に活性化するためにどうすればよいのかを考察する科学として経済学を提示する。一般原理の存在やこうした原理が抽象的普遍的原理であるという点は、シーニアと同一の方向性であり、マカロクのシーニア批判も採用された一般原理やその導出方法あるいは論証方法にあるのではない。一般原理が複雑な現実社会の中で無条件に論証結果をもたらすとする点にある。ただしマカロクは一般原理が狭い経験から導出された場合、誤った一般原理となることを認めており、また経済学の理論部分も未完成であるとしている。従って理論の精緻化、経済学の完成のためにも広い経験事実の収集が不可欠であり、こうした役割を担うものとして全体を数値としてとりまとめる統計への期待が寄せられる。

一般原理と現実社会のすりあわせを、歯車の動きと摩擦としてマカロクは提示する。歯車のメカニズムは抽象的一般的である。しかし歯車のメカニズムを知っているからといって、その歯車がいつもどのような場所でも一定の動きしかしないと前提するのは間違っている。ある社会や国家の「富の増進」を促進する方策を考える科学である経済学にとって、こうした使命を果たすためには、原理的に示された富増進の原動力が現実社会環境において促進されているか、それとも妨害されているかの検討が必要であり、できれば妨害要因を特定してこれを除去するのが経済学の役割である。こうした現実社会環境に関して強調されるのが、原理の作用に影響を及ぼす二次的法則であり、マカロクはこうした二次的法則の研究の必要性和現状ではそうした研究がないために、経済学はその役割を十全に果たすことができないとする。こうした不十分な状況の中で理論がドグマティズムに陥らないために要請されるのが、先述した広範な歴史的社会的事実の収集（統計）とその比較・分析である。そして不十分であるからこそ、経済学は目の前の現実問題への適用を重んじるべきなのである。

以上のようなマカロク方法論を problem-oriented method と名付けるとすれば、ミルの具体的演繹法は、特定の抽象的原理のみが現実社会に作用するのではなく、他の要因の複雑な相互作用を受けることを認め、個別事例が一般原理から逸脱する可能性があること、二次的法則の重

要性を強調する点に関して、マカロクと類似していると考えることができる。しかしマカロクの場合は、一般原理や法則は「全体としての集団」に該当するものであり、個別事例は「特殊な個別（集団）」に該当するものであった。従って経済学の対象がある国家や社会全体を対象とするものである限り、全体に含まれる個別集団が一般原理と異なった行動をしたとしても、原理の正当性を崩すことはない。これに対してミルの場合は、全体としての集団に関しても、一般性は「傾向」にすぎず論証の結果がそのまま妥当するとは限らない。また両者ともに経験・事実による検証を掲げるのであるが、マカロクが過去および現在の事実の収集（＝結果）を元に検証を行うとする傾向が強い。一方、ミルにとって、そもそも社会科学に帰納的方法が適用できないのは、観察によって得られたデータがある一定の因果関係の結果を表しているか確認することができない（原因の複雑性）からであった。従って、事実の収集だけでは原理の正当性を導き出すことも、逆に原理の訂正や進展を図ることもできないのであって、事例の豊富化とともに仮説の論理的検証＝三段論法の適用が不可欠となる。

次にあげられるのが、人間の集団を「個々の総計 aggregate」と見るのか、「個々の類型 type」と見るのかという相違である。マカロクは統計的事実を、より広範な人間の行動結果を集積したものであり、その集積の比較分析を通じて原理の検証をはかる。ミルの場合、社会科学全般に関しては未成立の二次的法則を扱う「性格学」特に「国民性格学」を前提している。具的演繹法が適用される経済学は、国民性格学の影響を分離することが比較的容易な領域であるからこそ、一般社会科学（社会学）からの分離が可能なのであるが、経済学が国民性格学と無縁なのではない。むしろ現在の経済学は「イギリスおよびアメリカ合衆国を対象として考察されている」ものであり、こうした国の性格類型を念頭におきつつ他国への適用をはからなければならないものである。従って、経済学においても人間の集団は類型として考えられ、類型間の比較によって一般原理適用の際の修正が設定されるのである。

事実の集積として統計的データを積極的に評価し、集計的方法によって、理論と現実のすりあわせをはかろうとするマカロクの方法は、ミルの目から見れば、事実収集を第一とする素朴なベーコン主義に陥る可能性をもっていた。ミルの具的演繹法は、予備的仮説や理論をもった帰納法を科学的方法論の基盤としながらも、経験から予備的仮説を形成することが難しい社会科学において、より仮説性を高めた帰納・演繹の混合的方法である。では逆に具的演繹法における演繹的要素や仮説的要素はどの程度のものであったのだろうか。

### 3) ミルと形式論理学・数式と経済学

ミルにとって演繹法とは三段論法であったが、これは帰納法のように新しい知識をもたらす推論方法ではなく、大前提としてメモ書きされた一般原理・法則が新しい事例に関して適用される場合の、検証過程を保障する手続きであった。その一方同時代に三段論法に対して叙辞の数量化

(ハミルトン) 記号論理学 (ブール) という一連の論理学の数式化としての改革が生じており、またこうした動きと連動して精密化学として経済学の数学化を推し進めたのがジェボンズであった。ジェボンズの論理学の著作に対して晩年のミルがハミルトンやブールの名をあげながら「問題が許す以上にデータに対し正確さを要求するような数的表現法と、無駄な複雑さで問題をややこしくする強い偏愛 (マニア) をもっているように思える」として、その経済学にも同様な傾向が見られるだろうとしていることはよく知られている。

ミルが記号論理学や形式論理学を評価しなかったのは、「何が実際に真なのかが問題なのではなく、前提条件から何が導き出され何が導き出されないかを明らかにする」ことが形式論理学の使命だと考えたからであった。ところがミルは、検証過程に三段論法を採用しつつ、命題が前提条件も含めて真であるかどうかを吟味する役割をも与えられていた。形式的真偽のみを問題とする形式論理学では、大前提の真偽を問えないという欠点が生じると考えたのである。さらにこうした形式性は人間の思考過程そのものではないとする。ミルにとって科学的方法論は通常の人間の思考過程を洗練化したものであり、従って形式論理学や記号論理学には方法論の出番はないということになる。特に人間心理への応用に関しては、質的相違を無視して量的相違にのみ還元し、これを数的に把握するものとして強く批判している。ミルは数学の役割を低めているのではない。が、ミルにとって数学も又経験主義的な基礎を持つものであり物的世界との交流を基礎とするものであった。そしてその役割は事物を塊としてとらえると同時に分割しうるものとして再配置することであった。ところが形式論理学や記号論理学は、ミルにとって数学の本質であった二要素を脱落させかねないものであった。それゆえミルはジェボンズの論理学に対して上記のような批判を展開せざるを得なかったのであろう。

形式論理学や数学に対するミルの対処を考慮に入れた場合、具体的演繹法における「演繹」や「仮説性」は、どのようなものと位置づけられるだろうか。まず具体的演繹法における仮説は、ジェボンズの仮説のような強い意味での仮説ではなく、むしろ帰納法に見られる予備的仮説に近いものといえる。確かにジェボンズ自身が批判しているように、ミルの蓋然性論は確率的推論ではない。そのため、経済学における一般法則は仮説的法則・傾向とはいえ、確実性を帯びたものと見られがちである。が、ミルが蓋然性で議論しているのは、その事象が起きる偶然 (確率) を計算することではなく、偶然の生じる頻度に関する積極的知識が必要であるとして、偶然や統計的平均からの逸脱を、近似的一般化の形成および未知の因果律発見の手がかりと考えている。以上から具体的演繹法における仮説は、抽象的一般法則から演繹的に導出された仮説というよりも、具体的事象との交流をふまえた暫定的演繹的仮説であるといえるのではないだろうか。

参考文献等は当日配布。